下顎骨、頭蓋骨および肺にみられた好酸球肉芽腫の1例

水城 春美・平野 公彦・小 泉 堅・福山 義邦

A case of eosinophilic granuloma in the mandible, the skull and the lung

Harumi Mizuki・Kimihiro HIRANO・Ken KOIZUMI

Yoshikuni FUKUYAMA

Key words: eosinophilic granuloma (好酸球肉芽腫), mandible (下顎), skull (頭蓋), lung (肺), multifocal (多発性)

緒 言

好酸球肉芽腫 (eosinophilic granuloma, 以下EG) の臨床像は多彩で、単発性あるいは多発性骨病巣のほか尿管症の合併や眼球突出、皮膚、リンパ節、肺などでの発現が認められている。われわれは、下顎骨、頭蓋骨および肺に発症が認められたEGの1例を経験したので報告する。

症 例

患 者：35歳 男性 外国航路船員。

初 診：1982年(昭和57年)9月■日。

主 訴：左下顎臼歯部頰側歯肉の有病性腫脹。

家族歴・既往歴：特記すべきことなし。

現病歴：10か月前、症状が初発。近歯科にて切開排膿処置を受け、症状は消退、7か月前、症状再発。消炎処置および「5」の抜歯を受けるも、疼痛持続するため某病院歯科を受診し、慢性骨髓炎の診断のもと「5」抜歯窩再搔爬、骨切除術を受けた。以後の治療の継続を希望して当科を受診した。

現 症：口腔外所見では顔貌は左右対称性で、眼球突出はなかった。

口腔内所見では「5678」は欠損し、頰側歯肉に軽度の腫脹、圧痛が認められた。

初診時検査成績：X線写真で、「1」7相当部の骨体にて不規則な骨透過像が認められ、血液検査成績では白血球数増多、GPT 軽度上昇、血沈亢進、CRP 陽性がみられた。

写真1 初診後約1年の再来時(下顎骨病巣第1回手術前)パントモX線写真

写真2 下顎骨病巣の生検組織の病理組織像(H-E染色、原倍率×200)

処置および経過：当初、前医による慢性骨髓炎との病理組織診断に従い、経過観察を行っていたが、8か月間航海のため通院が中断された。初診から約1年後の再来時、X線写真では骨吸収像の拡大が認められた(写真1)。同部の生検を行ったところ、リンパ球、好酸球および組織球の混在した肉芽組織がみられ、好酸球肉芽腫と診断された(写真2)。1983年10月、全身麻酔下に肉芽腫摘出搔爬術を施行した。術後経過は順調であったが、手術から9か月後の再来時のX線検査にて下顎前歯部、左骨体後方部および下顎枝部に骨吸収像を認めた。肉芽腫の再発と診断し、1984年9月、2回目の摘出搔爬術を施行した。病理組織所見は前回と同様であった。さらにその10か月後のX線検査で、左筋突起部に骨吸収像

大分医科大学歯科口腔外科学教室

(主任：清水正嗣教授)

Department of Oral and Maxillo-Facial Surgery,
Oita Medical University (Chief: Prof. Masatsugu Shimizu)

受付日：平成4年4月13日

写真3 頭蓋骨病巣摘出術前の頭部X線写真

写真4 経気管支肺生検施行時の胸部X線写真
両肺野にび慢性に小粒状網状陰影がみられる。

が認められたため、1985年9月に3回目の手術を行った。その後、1987年3月の再来時撮影の頭部X線写真で、右頭頂部に骨欠損像が認められた(写真3)ため、脳外科に対診。頭蓋骨の好酸球肉芽腫の診断のもと、同年6月、病巣全摘、頭蓋形成術が施行され、術後20 Gyの放射線が照射された。摘出組織は好酸球肉芽腫と病理診断された。また本症例では、初診1年後から胸部X線写真にてび慢性微細粒状網状陰影がみられていたが、1987年同陰影の増強が認められた(写真4)。内科にて経気管支肺生検が行われ、肺好酸球肉芽腫と診断、ステロイド療法が行われた。しかしあきらかな効果なく、漸減中止となった。なお数回行った骨シンチグラムで、下

顎、頭頂部以外の骨にも集積がみられたが、整形外科での診察では下顎骨、頭蓋骨以外の他部位にあきらかな病巣は認められなかった。下顎骨の第3回手術後6年の所見では顎骨、頭蓋骨病巣の再発はなく、胸部X線所見に著変はみられず、また他部位での新たな病巣の発現も認められていない。

考 察

本症例は慢性播種性の histiocytosis X (HX) に該当するが、眼球突出および尿崩症はなく Hand-Schüller-Christian 病とはいえない。Groopman¹⁾は HX を unifocal EG, multifocal EG および diffuse histiocytosis of Letterer-Siwe type に分類しているが、これに従えば本症例は multifocal EG に属するものと思われる。EG は肺での発現もみられる²⁾が、本邦の口腔外科領域の報告例には肺病変の合併例はきわめて少なく、その数は顎骨好酸球肉芽腫として報告された30数例中、自験例を含めわずかに4例のようである³⁻⁵⁾。

ご指導、ご校閲を載しました清水正嗣教授に感謝申し上げます。

なお本論文の要旨は、第59回日本口腔外科学会九州地方部会(1992年2月8日、鹿児島)において発表した。

引用文献

- 1) Groopman, J.E., and Golde, D.W.: The histiocytic disorders: A pathophysiologic analysis, *Ann Intern Med* 94: 95-107 1981.
- 2) 伊藤慶夫, 岩井和郎, 他: 本邦における肺好酸球肉芽腫症の実態について, *日胸疾会誌* 21: 539-547 1983.
- 3) 早津良和, 安達弘高, 他: 下顎骨に発生した eosinophilic granuloma の2症例, *日口外誌* 28: 1254-1259 1982.
- 4) 柳澤高道, 尾上祐悦, 他: 胸部X線像に異常陰影を伴った下顎骨好酸球肉芽腫の1例, *日口外誌* 33: 2126-2130 1987.
- 5) 永井 格, 京極順二, 他: 顎骨, 座骨, 肺にみられた好酸球肉芽腫の1例, *日口外誌* 36: 1096-1103 1990.